８月号

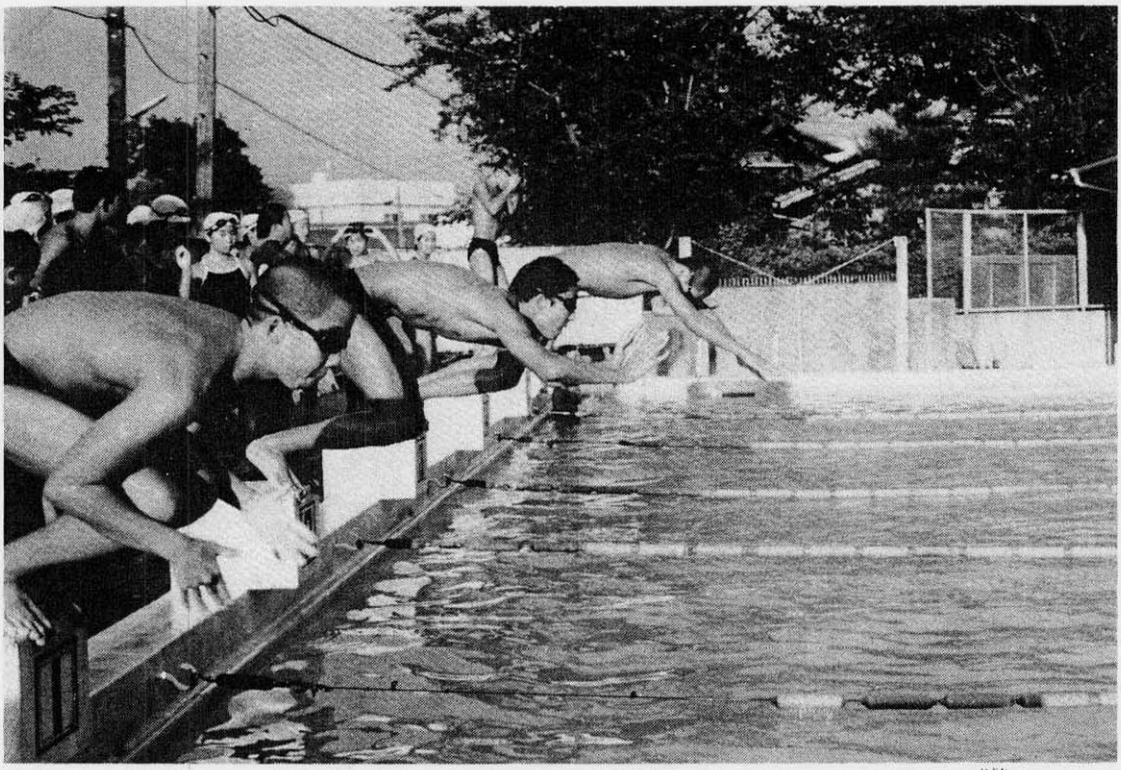
昭和62年８月１日
発行／編集
岡崎市教育委員会

〈自戒〉

昨夕、帰りのＳ・Ｔ時に生徒をしかり、日直生徒をして、日誌に、「しかられ、クラスのムード悪し。」と書かせてしまった。後味の悪い帰し方をした一件を自戒する教師の今朝の一行動。

衣笠選手記録達成の報道で沸きたった朝、印刷室の片隅できりぬいた新聞記事を印刷する手が忙しい。

つらい日々、鉄人衣笠は、「あしたがあるさ。」とつぶやいたと言う。「連続出場の記録は自分のものであって、自分だけのものではない。周りの人に支えられてやってきたのだ。」



（挑戦（いどむ）— 竜海中）

— 教育随想 —

青い瞳の内弟子

渡辺朝子

岡崎の山里に陶房を持ち、まもなく六年になります。その間、四人の弟子が育って行きました。同じ屋根の下で、食を共にし、五右衛門風呂に入り、四季の移り変りに一喜一憂し乍ら、私どもは、作陶に励む日々を送っています。

最初の内弟子、イングリットさんとの出会いをお話し致したく思います。

一九八一年の春、西ドイツから、美しく書かれた英文と、日本語訳の履歴の同封された手紙を受取りました。「残念ですが、私の陶房は二人の弟子で一杯です。」と簡単な断り状を出しました。東京の工房に数ケ月経った或る日、突然、「イングリットです。会って下さい。」と言う電話をもらった時には、私は自分の耳を疑わずにはいられませんでした。

当時二十五歳、小柄で美しい青い瞳の持主の彼女に、程無く、初めて会いました。狭い工房に迎えて話を聞くと、「ノウ」と言う手紙を受け取った其の事に望みを賭け、両親の反対を押して、シベリア鉄道で大陸を横断し、ようやく、日本に到着したのが二日前でした。そして、その動機は、一九七八年、ミュンヘンにある州立ギャラリーで私の作陶展を観て以来三年の月日を通して計画をたて、日本語を習い、ドイツの陶芸初級試験に合格、教育大二年中退と言うことを、頬を紅くし乍ら話すのでした。しかし、其の頃私の東京のアトリエは、誠に狭く、彼女を受け入れる余地がありません。

やがて一年がたち、再び便りが来ました。「益子で修業を終え、作品の発表をしますので、ぜひ観て下さい。そして岡崎の仕事場を作るのを手伝い度い。」と言うのでした。彼女のセンスの窺える小品展を観て、もう少し日本での才能を伸ばして上げ度いと思う気持も次第に強くなり、彼女を岡崎に迎えることにしました。最初に会った時の私の意見通り、すでに、伝統のある窯場を訪ね、常滑、瀬戸、多治見、信楽、そして備前から九州まで足をのばして、日本のやきものに大変詳しくなっていました。その旅の途中、手に入れたばかりの廃屋のような岡崎の現在の私の所にも立寄って行きました。

一九八二年、大きなリュックを背にした彼女を受入れたのは、夏の初めでした。仕事場は、雨がしのげる程になり、電気も水も使える状態に整っていました。瀬戸からの窯師の手で、私の所の独特の薪窯はほゞ出来上がっていました。然し、初窯が焚き終わると次の窯の為には、冬のさなか手入れをしなければならず、一徹な窯師と仕事をする日が続きました。彼女は、きびしい寒さにも耐え忍びました。翌年二月、二度目の窯は成功、度重ねる毎に、良い窯になって行く事が私ども二人の喜びでした。三度目の此の窯から出た彼女の作品が、毎日新聞社主催の日本陶芸展で賞候補となり、新聞で高く評価されました。

一九八三年帰国、粘土製造所に勤め乍ら、マイスターの試験に合格をして後、岡崎の頃から、愛の芽ばえたメキシコの陶芸家とミュンヘンで結婚しました。現在、二人で陶房を持っています。今も岡崎の山里を懐かしんで便りをくれます。

（日本工芸会正会員）

今様「郷中制度」

野外活動指導員　河村　喜美

「A子ちゃんはお米をかしてきてね。それから、S美は炉の火起こしを頼むわよ。Kちゃんまきを細かく割っといて。」

総員五十八名という小規模校の五・六年縦割り班の、夕食作りの始まりだ。

天候も怪しく、一刻も早く炊飯にかからねばと、六年生のリーダーM子の心ははやる。何をしたらよいのかわからずに、戸惑っている子に適切な指示がとぶ。

五年生の子たちはなたを持つことはおろか、包丁さえ満足に使えない子もいる。リーダーは自分の仕事をこなしながら、五年生の活動ぶりに目を注いでいる。

かつて、九州の島津藩には「郷中制度」という、子弟同士の磨き合いの場があったと聞く。先輩が後輩たちに、寝食を共にする中で、日常生活の規範やさまざまな学問、そして武士道を教え導いた。

現代の子どもたちは、一様に戸外で遊ぶ機会を失いつつある。「がき大将」という言葉も過去のものとなったと言われ

ふるさとシリーズ
―この人に聞く―

仏像彫刻

鈴木　香雲　氏

本宿に仏像を彫ってみえる方がいらっしゃると聞き、本宿町柿崎のお宅へお訪ねした。国道一号線から新箱根へ抜ける道へ折れて百メートル余り、細い道を西へ入ると目指す鈴木清司氏のお宅である。号を香雲と称していらっしゃる。

「一号線沿いに二十六年ばかりおって、その筋向かいの今やぶになっているところが、先祖代々おった場所です。私の代にあそこへ越して、今またここへ越して、一代に二度も越しておるんです。」

テレビの上には、つい三日前に彫り上げたばかりという仏像が置かれている。先祖代々仏師をやってみえたのかとお尋ねすると、

「いいえ、私の代からです。私は、最初は仏壇の彫りとか座敷欄間、お寺の欄間とかをやっておりました。ところが立体の方が好きだったから、途中から院展派の彫刻をやっていた多和田という人の所へ行くようになりました。各所へ行きましたもんね。」

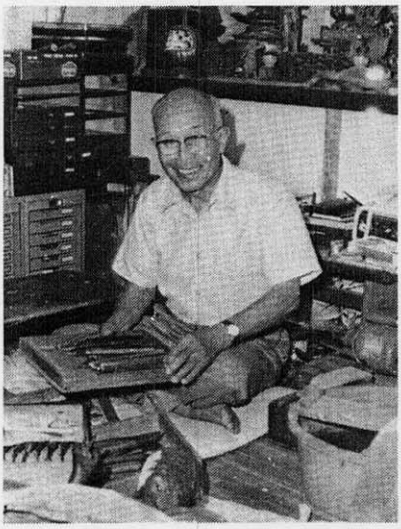
外にも、岡崎では矢作、遠くは広島、大阪四天王寺でも修業をされたとのことである。

「昭和十年頃、大塚の光明寺さんの富楼那尊師さんを彫ったのが一番先です。岡崎へ帰って昭和三十年頃だったか、六供の薬師寺のお薬師の両脇へ、日光、月光の立像を彫りましてね。それから十二神将、賓頭盧さんに弘法さん。あそこはたくさん造らしてもらって。一か寺で数多く彫ったのはここです。」

一木での大きいものでは、

「丸山の妙見宮の横に釈迦堂ができまして、そこの御本尊を一木で造りました。あそこの境内の直径三尺八寸の松が松くい虫でやられて、それで丸彫りで一丈三尺の仏さんに……。」

高隆寺の毘沙門天・八臂弁財天、勝鬘皇寺の太子堂の両脇の彫り、松本観音の子安地蔵、慈光院の仏画など、市内の寺院には、鈴木氏の手によるものが数多い。



「一番大きいものでは、名古屋の金龍寺の不動明王の座像です。座って六尺ですから。これは寄木です。木曽のヒノキを五寸の厚みで、首・胴・膝などの部分に分けて造りました。」

「大きいものを造るときは、十分の一か五分の一のものを造って、それを基にして造ります。一度原型を造っておくと割り出しが楽ですからね。」

お訪ねした日も、津島のお寺から修理を依頼されたという阿弥陀如来や四天王が仕事場に置かれており、鈴木氏の高名の程がうかがわれる。

長時間にわたってお話をして頂いたがその間、終始変わらぬ笑顔と穏やかな物腰で私たちに接してくださった。それも六十年近くの年月を、常に仏様の傍近くで暮らしていらっしゃるうちに身に備わったもののように思われた。

（生年月日　大正三年四月五日
住　所　本宿町柿崎十九―五）

創造の芽を摘む

図工・美術科指導員

鈴木　正純

工夫する子どもの目には輝きがある。山も川も砂漠も走れる車を作るM君の目は、一点を見つめて離れない。きっと頭の中は、野山をさっそうと走る車のメカでいっぱいなのであろう。

M君がはさみを持って厚紙を切り始めた時、先生の「作業やめ」の合図があった。この時、M君はすぐ道具を置いて、先生の声の方に目をやっていた。

先生は、一人ひとりの顔を見届けるように見回して、全員の手の動きが止まるのを待った。

この一コマの場面に、一方では制作意欲の阻害という問題が他方では指導技術、学習内容の徹底の問題が介在している。

教師は、たった一人の子どもの目も見落とさないように自分の目を働かさなくてはならない。子どもの言葉に耳を傾けねばならない。心理を察知して行動すべきである。何よりも創造の芽を摘むことがあってはならない。

るが、どっこい、このO校の野外活動には、正に「郷中制度」が生きている。

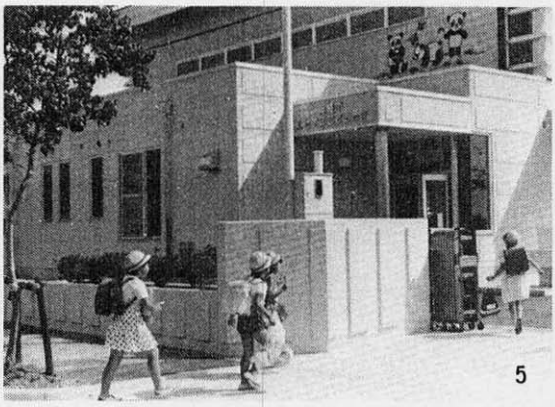
一歩下がったところにベテランT先生の笑顔が、子どもたちを見守っている。

2

1

学区こどもの家を訪ねて

3


5

4

学区の児童に健全な遊びを与え、情操を豊かにすることをねらい誕生した「学区こどもの家」であるが、歴史が浅いこともあって、まだあまりよく知られていないように思われる。

そこで昭和六十一年に設置された井田と城南の学区こどもの家、六十二年設置の広幡、上地、本宿学区こどもの家のすべてを訪問し、お話をききながら子どもたちの喜んでいる姿をカメラに収めてきた。

「こどもの家はどこにあるの?」と学校帰りの一年生に聞いてみる。「まっすぐ行って、壁に絵がいっぱいあるところ」との返事。こどもの家は小学校の近くにあり、どの子どもに聞いてもよく知っていて親しみを込めて教えてくれる。

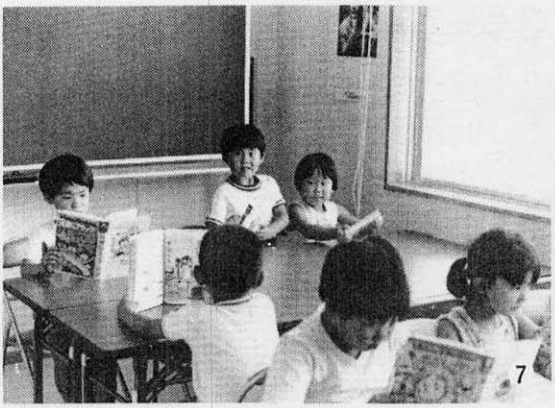
遠くから見るこどもの家は、午後の光に白い壁がまぶしく輝いていた。その光の中でイルカが泳ぎ、森の動物たちがおとぎの国そのままに歌い、踊っている。建物に近づくと子どもたちの元気な声が体育館の天井にこだましていた。

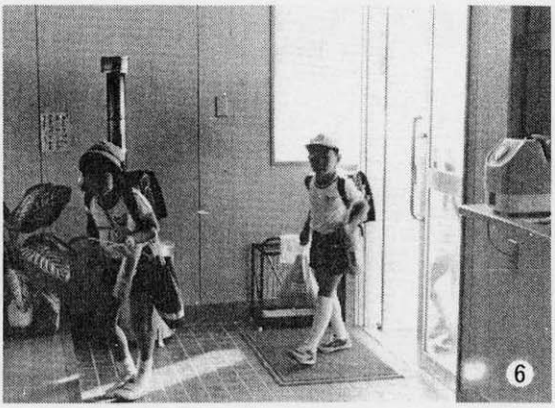
こどもの家は学区の小学生を対象に建てられているが、子どもは午後一時から六時、おとなは午前十時から正午までと午後六時から十時まで利用できる。

ここでの子どもたちはみんな兄弟姉妹のような感じで遊んでいる。

一日平均七十人前後の子どもが利用するというから利用度は高く、こどもの家は子どもたちのオアシスとなっている。

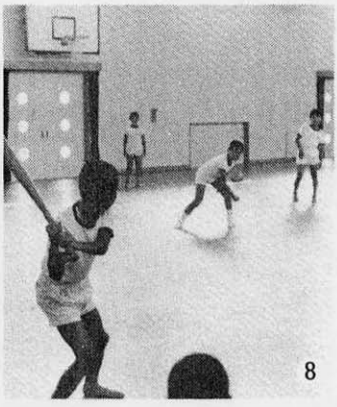
学校ではどうしても同学年の者同士で遊ぶが、ここでは幼い子どもも高学年の子


7


6

①元気な子どもたちの歓声が体育館から響いてくる城南学区こどもの家。
②十分に遊んだ子どもたちは笑顔で家路につく。本宿学区こどもの家にて。
③涼しい風が吹きぬける街路樹の小みちの先に、広幡学区こどもの家がある。
④開かれた玄関と壁画の小鳥が子どもたちを呼んでいる井田学区こどもの家。
⑤自分の家に帰って行くような感じで入っていける上地学区こどもの家。

9


8

12

11

10

どもといっしょに遊ぶ機会が多いので、おもいやりや尊敬の念が育つと指導員の先生方は目を細める。とにかく子どもたちはよく駆けまわりたくさん汗をかく。汗をかくと「おじさんお茶ください。」と、子どもが気楽に事務室に入ってきて冷蔵庫を開け指導員の先生が冷やしておいたお茶のやかんを次々空にしていくところもある。その冷蔵庫は学区の電気屋さんが中古品を持ってきてくれたものだとのこと。

レクリエーション室とは対照的に図書室では子どもたちが夢中で静かに本を読んでいる。そこには「○○さんが寄付してくれた本です。」との貼紙とお礼の言葉が書きそえてある。このように学区こどもの家には学区の人々の善意がいっぱいある。

⑥「こんにちは。」より「ただいま。」の方が似合いそうなこどもの家の雰囲気。
⑦歴史まんがに夢中な子どもたち。本箱の前には「家でいらなくなった本があったらみんなのために持ってきてください。」との張り紙。
⑧室内で野球!? バットは軟質プラスチック、ボールはテニスボール。
⑨バレーの支柱を立てる穴をカップに見立て、子どもたちがゴルフをやり始めた。そこで先生方が手作りでクラブを。
⑩子どもは競って遊び、汗をいっぱいかく。
⑪みんなに人気のあるトランポリン。ここへ来るとまずトランポリンで一汗。
⑫みんな仲よくバレーボール。遊びの中から必要なルールを作りだす。

本日の宿題「早く寝ること」

岡崎小　中原　和子

「お早うございます。」
「着席。」
あれ、座ったとたんY君があくび。おやおや、Mさんも大きな口が開いて、とろんとした目つき。
朝の会が始まったばかりの我がクラスの様子です。おかしいな、寝不足かなと思い、
「君たち、昨夜は何時に寝たの。」
と聞いてみると、九時半頃三人、十時半頃四人、残りは十一時過ぎ。なんと、K夫は全然眠っていないと言うのです。
「何していたの。」
の問いに、K夫は、
「十二時まで下敷きに絵を描いていて、それから本読んでいたら朝だった。」
と平気な顔をしています。時々居眠りしている原因は、こんな生活かと驚いてしまいました。
K夫のような児童は特別でしょうが、考えてみれば、六月に入り水泳学習が始まり、七月の大会目指して部活動の練習をし、家に帰ってからは、八時過ぎまで塾通い。それから夕食と風呂。そして宿題。睡眠時間は少なくなるはずです。
その日は、宿題はただ一つ。明日の朝、すっきりと目がさめるように、今夜早く寝ること。
K夫は、
「えっ。一番難しい宿題だ。」
と言いながら帰って行きました。
さて、次の日は？
やはり、みんなすっきりしたいい顔をしています。いつも深夜放送を聞いている夜ふかし組のT夫も、
「きのうは、七時半に寝てしまった。いつもは起きれるのにきのうは起きれんかった。朝まで寝てしまったのだ。」
とのこと。
この日一日、顔つきはもちろん、子どもたちの学習に対する姿勢（やる気）もとてもよかったように思えました。
今の子は、やる気がないなどと無責任なことを言うけれど、やることが多くて、ゆっくり休むゆとりがないのです。
「時々、きのうのような宿題をだすね。」
「やったあ。」
子どもにとって必要なことは、ゆとりある生活だと感じた出来事でした。

生徒の笑顔

南中　藤井　美雄

昨日の六限目、生徒の顔が見たくなって、四階へあがってみると、A子がうかない顔をして戸口に立っていた。
授業が始まるというのに教室へ入れないのである。
直感的に「何かあったな。」と感じた。話を聞いてみると、A子の生き甲斐である部活動で、友達や先生とうまくいかないと言う。
A子に言わせると、B先生は「あの子たちばっかり使って、私が何か言っても無視、みんなも先生の御機嫌ばかり取って…」とA子特有の考え方でわがままを言っている。
A子は自分中心に部活動がやれないと満足できない性格である。
こんなA子の性格をよく知っている私としては、強く出ることもできず、よく考えさせてA子の自発的な反省をひきだしたい。そして、部活動や学級の仲間と上手に生活させたいといつも思っている。楽しい話をしている時は良いのだが、注意をしたり、きびしい事を言ったり、また、A子の性格上の問題に触れたりするとすぐに目をつりあげて聞く耳を失ってしまう。
そうしたとき、私はどなり声がのどまできているのだが、
「どなったら、A子はこわれてしまう、どなってはいけない。」
と何度も自分に言いきかせながら、A子の目をみつめ、A子の心に話しかけようと努めている。
「先生だって、いかんじゃん。」
とか、
「なんで私ばかりがまんしなければいけないの。」
A子はなかなかわかってくれない。最後には、いつまでもあきらめない私に、
「もういいわ、先生がそんなに言うなら、もう一度やってみるわ。」
とにっこり笑顔を見せて、うなずいてくれるのである。
三年生の担任は確かに苦しい。しかし、こうした人間的なふれあいや、悩みの中で、A子の笑顔は、とてもさわやかな感じを与えてくれる。
私にとって悩みのタネであるはずのA子、しかし、A子の笑顔は、私の活力の源になっているようにも思える。

おしらせ

基本的な交通指導の徹底を

―過半数を占める不注意による交通事故―

愛知県下の交通事故死者数は今年度は全国一の不名誉な記録を返上し、減少しています。本市の児童生徒の交通事故件数も昨年同期と比べ、25％減と大幅な減少を示しています。

しかし、学年別の事故件数を見ると、小学校一・二年生で、全件数の半数（前年度44％）に達しています。そのうち75％が飛び出しです。原因別に見ても飛び出し、出合い頭等不注意によるものが58％と、事故の半数以上を占めています。

まだまだ交通規則が守られていないのが現状です。横断のし方、自転車の乗り方など、特に小学校低中学年を中心とした交通指導の徹底を図っていきたいものです。

交通事故発生件数

（七月二十日現在）

・月別発生状況

年度／月	61	62
4	11	12
5	10	7
6	9	0
7	2	5
計	32	24

・学年別発生状況

年度／学年	61	62
小1	10	7
2	4	5
3	7	2
4	6	2
5	0	0
6	0	2
中1	2	1
2	2	3
3	1	2
計	32	24

・原因別発生状況

原因／年度	61	62
飛び出し	12	11
横断	9	3
接触	11	4
出合い頭	0	4
自損	0	2
計	32	24

■近代美人画名作展開催

岡崎市美術館は、開館十五周年を記念して、近代美人画名作展を開催する。

期間　八月五日（水）―二十三日（日）

会期中無休

開館時間午前十時―午後六時

昭和62年度夏季実技講習会

教科・領域	期日	場所	人数
社会	8．3	岡崎市東部地域	43
算数・数学	8．4	岩津市民センター	55
理科	8．1	矢作南小学校	71
音楽	8．3	小豆坂小学校	56
英語	8．4	六ッ美市民センター	46
小学校家庭	8．4	大樹寺小学校	24
学校図書館	8．4	矢作市民センター	87
特殊教育	8．3	美川中学校	37
視聴覚（VTR）	8．3～4	緑丘小学校	36
視聴覚（パソコン）	8．3～4	三河高等学校	44
図工・美術	8．3	親子造形センター	56
技術家庭	8．3	甲山中学校	43
書写	8．4	働く婦人会館	38
学校保健	8．4	南部市民センター	60
視聴覚（校内放送）	8．5	六ッ美中部小学校	150

堂々と感動の主張……

―岡崎市中学生弁論大会、最優秀賞に竜海中篠永圭子さん―

七月四日（土）午後一時から岡崎市せきれいホールで、昭和六十二年度岡崎市中学生弁論大会が行われた。本年度の「少年の主張愛知県大会」が岡崎市で開催されることを契機にした、初めての市内大会である。市内各中学校の代表十七名が、日ごろの体験をもとに意見発表を行った。成績は次のとおりである。

○最優秀賞

竜海中学校三年　篠永　圭子

○優秀賞

美川中学校三年　柴田　晃江

河合中学校一年　島田　知春

新香山中学校三年　金築　弘美

○努力賞

甲山中学校三年　天野　和広

南中学校三年　政岡　美和

葵中学校三年　松村かおり

城北中学校三年　稲吉　広道

福岡中学校三年　水越　裕子

東海中学校二年　中村　公美

常磐中学校三年　江坂　美紀

岩津中学校三年　新家　優子

矢作中学校三年　佐藤　大祐

六ツ美中学校三年　鈴木　智美

矢作北中学校三年　倉橋　路枝

竜南中学校一年　岩崎志朱子

附属中学校三年　鈴田　善幸

■昭和六十二年度岡崎市教育研究論文の募集要項

○部門

第一部門　個人研究

第二部門　共同研究

○字数

四百字詰原稿用紙（B4判）三十枚以内。表、写真、グラフは本文に含める。

○提出期日

中間報告　九月五日（土）

研究論文　十二月一日（火）

○提出先

岡崎市教育委員会学校教育課

■県教育研究論文締切迫る

○字数

四百字詰原稿用紙（B4判）三十枚以内。

○提出期限　八月二十四日（月）

○提出先　市教委学校教育課青木指導主事

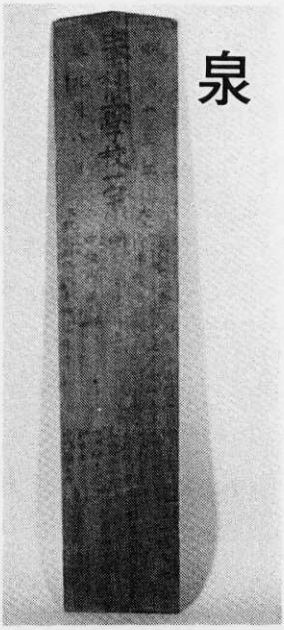
○論文には、応募部門、題名、校名、職名、氏名を明記。

■全日本バレーボール小学生県大会（七月五日　豊明市）

竜美丘小女子が、圧倒的な強さで六年連続六度目の優勝を飾り、八月十三日から東京で開かれる全国大会に出場する。なお男子二位の山中小、女子二位の上地小は東海大会へ出場する。

泉

棟札



山中小学校

明治五年、政府は国民的な教育の振興を図ることを目的に、「学制」を領布した。

各村では、寺子屋の師匠や僧侶を教師とし、寺院や民家を借用して郷学校を開いた。

明治八年頃から、生平、連尺など小学校の新築が見られるようになり、明治十二年、学制が教育令と改正された頃から一段と学校建設が進んだ。

右の棟札は、明治十三年九月当時の舞木村、羽栗村、山綱村、池金村の四か村が連合して設立した現山中小学校のものである。

棟札によれば、大工、木挽の外に各村から二十数名の役員が建設に関与している。

四か村が連合してまで、学校建設という大事業を成し得たということは、政府の政策とはいえ、村々が教育に大きな関心を持っていたことがうかがわれる。

反面、就学率は五十パーセントに満たない学校も多かった。その後就学率は向上し、明治三十三年には、小学校令の改正により尋常小学校四年制義務教育が確立した。

「必ず邑に不学の戸なく……」の理念は、村々の努力により着実に実現されていった。

・表紙写真　竜海中
・表紙詩　竜海中
・カット　男川小

宇都宮　森和
奈良　紀代子
山口　泰代

この本を

＊さくら道―国鉄バス車掌 佐藤良二さんの生涯　中村儀朋
風媒社　¥1200

＊心の教育　日本教育の再発見　沖原　豊
学陽書房　¥1300

＊翔びなさい教室の天使たち　福田節子
講談社　¥1000

＊天智伝　中西　進
中央公論社　¥1350

※自分らしく生きる　中野孝次
講談社現代新書　¥ 480

いまや日本の中にだけいて，この平和な豊かさにとっぷりつかっていたのでは、日本の真の姿は見えない。日本の「平和」「繁栄」「豊かさ」「進歩」が、何の上に成り立っているかを見つめ、その認識の上に立って新しい生のあり方をつくっていくのでなければ、日本は再び戦争への道をたどることになるだろう。現代を真剣に見つめてきた著者が、迷える若い世代に呼びかける熱い魂のメッセージ。

オアシス

オートマチック車の事故が多発している。本校でも半数の職員がＡＴ車に乗っている。教習所で泣かされた坂路発進の心配がなくなり、安心して運転できると喜ぶ人も多い。しかし、便利さの陰に思いも寄らない危険が潜んでいた。

万能ではないＡＴ車。いつ、いかなる場合も油断なく、心して。

時間。それはだれにも平等に与えられているもの。

そして、どんな金持ちでも、またどんな権力者といえども余分に手に入れることのできないもの。それが時間。

まったく平等な二十四時間なのに、使い方の上手下手の差が目立つのが時間。

原稿締め切りが近づき、また同じ後悔。

朝顔につるべとられてもらい水

自然に伸びた朝顔のつるで、少々不自由しても、それを味わうゆとりを感じる。

バイオテクノロジーの発達で、人間が自然を自分の都合のよいように変えてしまおうとしている。便利になるのは結構だが、自然の姿そのものを愛する心を失ってはならない。

水難事故の多い八月。

子供たちの遊び場の有無のこともあろうが、暑さのために心地よい水を求めるのも無理からぬことである。

命にかかわる水難事故。防止には万全を期したいものである。学区の理解と協力で、プール開放の期間を延長するのも対策のひとつではなかろうか。